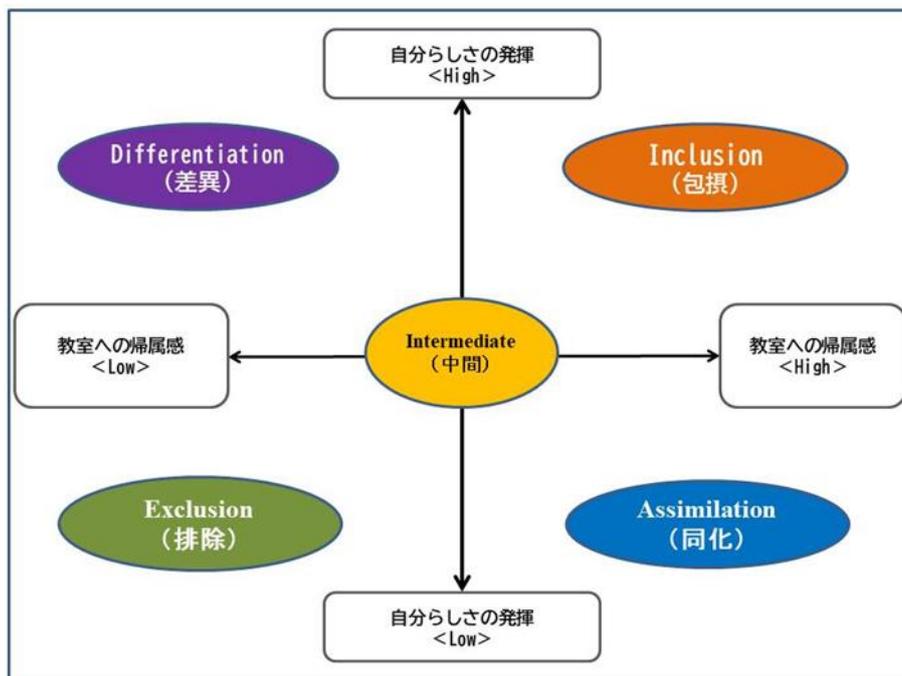


**包摂感とデジタル化の中で考える子どもの幸福度**  
—日本の地方小中学校2,158人調査の結果—

高知県内の教育委員会の協力を得て、小中学生2,158名を対象としたアンケート調査を実施し、学校における多様性の経験、探究心、親切・ケアの志向、デジタル機器の利用状況が子どもの主観的幸福感にどのように関連しているかを分析しました。子どもの幸福度、探究心、親切・ケアの特徴については、Inclusion (包摂) \*1、Exclusion (排除) \*2、Assimilation (同化) \*3、Differentiation (差異化) \*4の4類型間で差が認められました。これらの結果から、多様な子どもがそれぞれの形で成長できる教育環境を整備することが、幸福度の向上に重要である可能性が示唆されました。本研究は、教育のデジタル化と多様化が進む現代社会において、子どもの幸福度向上に資する科学的知見を提供するものであり、今後の教育実践や政策形成への貢献が期待されます。



多様性に関する4つの環境類型：調査では「自分らしさの発揮」を縦軸に、「教室での帰属感」を横軸に設定し、回答に応じて子どもたちの学級環境を上図の5つの類型に分類しました。

## 【概要】

廣瀬教授は、高知県内の教育委員会の協力を得て、域内5校区の小中学生2,469名を対象とする大規模なアンケート調査を実施しました。調査はインターネットを用いて行われ、参加を希望した児童・生徒は放課後などの時間を活用し、学校配付のタブレット端末を使って回答しました。その結果、2,158名から有効回答を得ました。

学校における多様性の経験、探究心、親切やケアの志向、デジタル機器の利用状況といった要因が、子どもの主観的幸福感とどのように関連しているかに注目しました。さらに、児童生徒の社会的な関わりの質を示す指標として、家庭でのコミュニケーションや大人の応答性もあわせて検討しました。

調査では、「自分らしさの発揮」を縦軸、「教室での帰属感」を横軸とし、子どもたちの学級環境を次の4つの類型に分類しました。調査で集めた4つの類型とその他のデータを多項ロジスティック回帰分析や中央値回帰分析を用いて統計的分析を行ったところ、次のような結果が得られました。

1. 児童生徒のおよそ3分の2が Inclusion（包摂）に分類され、最も多い割合を占めた。
2. Inclusion に分類された子どもは、他の群と比べて主観的幸福感が高い傾向を示した。
3. Exclusion（排除）に分類された子どもは、幸福感が低い傾向が見られる一方で、「ケアや親切の志向」は高い傾向を示した。
4. Assimilation（同化）に分類された子どもは、幸福感は低くないものの、探究心や「ケア・親切の志向」が相対的に弱い傾向を示した。
5. Differentiation（差異化）に分類された子どもは、帰属感が弱い一方で、探究心が高い傾向を示した。
6. 子どもの問いかけに対する大人の前向きな応答は、子どもの探究心の高さとの正の関連を示した。
7. デジタル機器の利用に関しては、家庭や学校でルールを設定し、それを守っていることが、単なる利用時間の長短よりも、主観的幸福感・探究心・ケア・親切の志向との間で正の関連を示した。

以上の結果から、Inclusion（包摂）環境、探究心、「ケア・親切の志向」、およびルールに基づいたICT活用はいずれも主観的幸福感との正の関連を示し、さらに、子どもの問いかけに対する大人の前向きな応答がこれらに間接的に関与していることもわかりました。

総合的に考えると、包摂的な環境はもちろん重要ですが、それぞれの環境にある子どもにとって、教室や生活の新しい「友人」（登場人物）となりうるデジタル機器と適切な関係を結ぶことが大切と言えるでしょう。例えば、教室に帰属感を持たない「差異化」の環境にある子どもたちも、ICTを上手に活用することで自分らしさを発揮し、探究心を育てている可能性があります。多様な子どもがそれぞれの形で成長できる教育環境を整えることが、幸福度の向上にとって重要であると考えられます。

## 【学校や家庭への実践・政策的示唆】

本研究は、教育実践や政策に対して次のような示唆を提供します。

1. 教員研修などを通じて、子どもの帰属感と自分らしさの発揮をともに促す包摂的な教育を推進すること

2. 子どもが安心して質問や意見を共有できる、心理的安全性の高い教室環境を整備すること
3. 子どもの特性に応じたデジタル機器の活用指導と学習環境を整えること
4. ルールに基づく ICT 活用を推進し、家庭と学校の連携・協働を強化すること（デジタルという新しい「友人」との関係性を家庭や学校で共有し、考える機会を設けること）

こうした包括的かつ文脈に即した取り組みにより、ICTの可能性を最大限に引き出し、子どもの幸福感の向上に寄与することが期待される。

#### 【用語の定義など】

本調査では、\*1～\*4 までを次のように定義しています。

Inclusion（包摂）：自分らしさの発揮が尊重され、帰属感も得られている環境

Exclusion（排除）：自分らしさの発揮も帰属感も得られていない環境

Assimilation（同化）：帰属感はあるが、自分らしさの発揮が抑えられている環境

Differentiation（差異化）：自分らしさは発揮できるが、帰属感が弱い環境

その他、図中の Intermediate（中間）は、7件法（1～7の選択肢）で回答する質問において、少なくとも1つの質問で「4」と回答した子どもを分類したカテゴリーです。

#### 【論文情報】

論文名：Children's well-being in the context of perceived inclusion and digitalization: Evidence from a survey of rural Japanese classrooms（包摂感とデジタル化の中で考える子どもの幸福度 –日本の地方小中学校2,158人調査の結果–）

著者：廣瀬 淳一（高知大学 教育研究部総合科学系地域協働教育学部門）

掲載誌：Education Sciences

DOI：<https://doi.org/10.3390/educsci15091240>

公開日：2025年9月18日

#### 【問い合わせ先】

<研究に関すること>

高知大学安全・安心機構 教授

廣瀬 淳一（ひろせ じゅんいち）

TEL：088-888-8020

E-mail：[hirose-junichi@kochi-u.ac.jp](mailto:hirose-junichi@kochi-u.ac.jp)

<報道に関すること>

高知大学 広報・校友課広報係

TEL：088-844-8643 FAX：088-844-8033

E-mail：[kh13@kochi-u.ac.jp](mailto:kh13@kochi-u.ac.jp)